

## 牧師室から(10月25日)

東北にいる時に、鈴木牧師が高校で基督教の歴史を教えたことがあった。

高校2年生の8クラス、木曜日と金曜日の4コマずつであった。授業数が多いな、と戸惑う鈴木牧師を「教会の仕事は私に任せて。同じ内容なんだから大丈夫じゃないの。」と私は強く押した。しかし、後に他の方々から「あら～、鈴木先生、大変、かわいそう！」という話を聞いて、やっとそのしんどさが分かってきた。

その時は東北教区の書記も兼ねていたので、学校の授業が終わると、教区事務所へ、車で帰宅した顔はいつもヘトヘトであった。

「あいつら、頭にくるな、可愛くないんだよ」ブツブツ言いながら、夕食を取る。授業中、先生の話しを無視して寝ている子、自分のことに夢中になっている子、そして、こそこそ横の子と話をしたり、動き回る子までいたらしい。クリスチャンではない彼らにとっては重要ではない科目で、優しい先生を舐めるのは面白いことの一つであったかも。

しかし、ある日帰宅して洋服のあちこちのポケットから細々の沢山のものを出していた。小さなバッチ、お菓子、キーホルダーなど、「修学旅行のお土産だって」と言いながら、鈴木牧師は「あいつら、可愛いところもあるな」と微笑んでいた。

期末の試験の解答のチェックの時は400人近くだったので、わたしも手伝った。時々解答の代わりに、「私はキム・ヨンア(当時有名だった韓国のフィギュアスケートの選手)が大好きです。」「私は鈴木先生を尊敬します。牧師であること、そして奥さんが韓国人であること。」「先生の教えに感謝しています」などが書かれている。私たち二人は「これで点数が上がるわけではないぞ」と言いながらも何となく心が温まる。

来年からは時間を少し減らしてもらいたいな、と思っていたところで転任となり、鈴木牧師は安堵感と寂しさが交錯していたよう。

私自身も東北の高校や大学の礼拝で語る機会をいただくことが多くあった。その高校や大学は東北の地域の教会に密着した働きで多くの牧師たちが招かれていた。

学校の先生の指示で、礼拝出席が成績に反映されるためではあるが、教会の礼拝にくる学生がしばしばいて、顔見知りになり、いろいろ語り合うこともあった。感受性豊かな若い日に、教会の門をくぐり、主のみ言葉を聞いたり、クリスチャンとの交わりをもつことがいかに大事であるかを、身をもって感じられることである。

卒業生が大人になって何かのきっかけで礼拝に来始めたり、子どもが礼拝に来るのを許し喜ぶ親はやはりミッションスクールに通った人が多い。ミッションスクールの働きがいかに大きな宣教の業を担っているのか、教会の将来にも関わる大事な業であるのに違いない。宣教師たちの教育を通して行われたその働きの恩恵を、私たちは今も受けているのである。

ミッションスクールの宣教の業が祝されますように。先生方のお働きにお礼と応援の拍手を送りたい。

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。(コヘレト 12・1)」

(鈴木善姫牧師)